

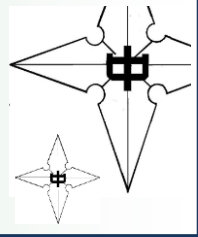
南浦和中だより

〒336-0026 さいたま市南区辻 6-1-33

TEL 048(863)0753

FAX 048(836)1589

さわやか相談室直通 TEL 048(837)5909



『ジャングルJungle』

校長 おお こう うち のり かず 大河内 範一

中学生だった頃、学校の二大イベントといえば「文化祭」と「体育祭」だった。時代の流れとともに文化祭は姿を消しつつあるが、当時はクラスごとにテーマを決めて展示発表をするのが定番だった。ただし、自分が通っていた中学校では、参加するかどうかはクラスの判断に委ねられていて、生徒だけでなく

なぜか担任の意向もかなり反映されるという、昭和の香りが漂うシステムだった。

中学1年の担任は「文化祭には参加しない派」と噂されていた。何人かで「なんとか参加させてほしい」と懇願しに行ったところ、意外にもすんなりOKが出た。我々がまだ初々しくて可愛げがあったので、気分がよかったのではないかと分析していた。

クラスのテーマは『ジャングル』に決定した。教室を密林の迷路にして、訪れた人に神秘的な空間を体感してもらおうという壮大な構想だった。

「土台設置班」は、発砲スチロールでジャングルの土台を制作する担当だったが、近隣の店を回っても材料が集まらず、結局魚屋さんから大量に譲ってもらうことに。その結果、洗っても取れない生臭い魚臭が教室中に充満し、密林というより魚市場のような空気感になってしまった。

「密林迷路班」は、人の背丈ほどの立派な植物を刈ってきて、発砲スチロールに刺して迷路を作る予定だった。しかし土台への固定がうまくいかずグラグラの状態、日が経つにつれて植物がしおれていき、文化祭当日にはすべての植物が床に横たわるだけに。挙句の果てに、植物に付着していた昆虫たちが教室を自由に歩き回るといって、まさに野生の王国状態となってしまった。

「住居建築班」は、段ボールと机を駆使して高床式倉庫風の家を制作した。密林を恐る恐る進んでいくと、奥地で原住民に遭遇するという演出だったのだが、床に敷かれた植物の上を歩くだけの見晴らしのいい展示物になってしまったため、住居が丸見えになり、神秘性はゼロに。原住民に扮した男子が住居の中で「いらっしゃいませ、いらっしゃいませ」と連呼する声が、教室に虚しく響いていた。

担任の先生は、すべての活動を任せてくれたのだが、この惨状を茫然と見つめ、他の先生が見学に来るたびに「まいったよ…」とつぶやいていた姿が忘れられない。

それでも、我々は心の底から楽しかった。うまくいかなかったって、みんなでアイディアを出し合って何かを作り上げた時間は、かけがえのない宝物なのである。

中学校生活って、失敗も含めて、やっぱりいいもんだ。あの「ジャングル」は今でも心の中で輝いている。こんな思い出があるから、挑戦し続けようとする生徒たちを応援したくなる。あの頃の自分たちに、そして今の君たちに、拍手を送りたい。